

氏名	荒 木 久美子
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 573 号
学位授与の日付	昭和59年3月31日
学位授与の要件	医学研究科内科系小児科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	小児期の prolactin 分泌予備能に関する研究
論文審査委員	教授 太田善介 教授 関場 香 教授 産賀敏彦

学位論文内容の要旨

小児の下垂体の prolactin (PRL) の分泌予備能を検討する目的で、1～18才の正常小児247例について、PRL 基礎値、TRH 負荷による PRL の反応、LH-RH 負荷による LH の分泌予備能を測定した。

PRL の基礎値は骨年齢、性による差を示さず、その幾何平均値 ($-1\text{ SD} \sim +1\text{ SD}$) は 7.1 ng/ml ($4.6 \sim 11.0\text{ ng/ml}$) であった。max. Δ PRL (TRH 負荷後の頂値より基礎値を減じた値) は PRL の総分泌量および単位血清当りの PRL 放出量と良好な相関を示し ($P < 0.001$)、下垂体の PRL 分泌予備能の指標として適当であると考えられた。max. Δ PRL (PRL の分泌予備能) は、思春期初期まで、加齢とともに増大し、性差もみとめられないが、思春期中～後期になると、男児では思春期初期に比して減少するのに対し、女児では更に増大した。max. Δ PRL は、男児では思春期中期まで、女児では思春期後期まで加齢とともに、LH の分泌予備能と平行して増大するが、同一症例においては、LH の分泌予備能の増大が PRL の分泌予備能の増大に先行した。PRL の分泌予備能の増大には、幼児から学童期では LH-RH が、思春期にいたると、更に testosterone 及び estrogen が関与すると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は小児の下垂体のプロラクチンの分泌予備能を臨床的に検討したものであるが、これまでにほとんど明らかでなかった男女差、年齢などによる変化を明らかにした価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。